

日本語の「打ちことば」の概念に関する一考察

内山和也

0. はじめに

文語と口語は言語（ことば）の区別であり、文語体と口語体とは文体のひとつの分類法である語体（word style）の区別である（魚返 1963：161ff.）。したがって、定義のうえでは、文語体の口語（例：古いスタイルの話しことば）や口語体の文語（例：現代的なスタイルの書きことば）がありうることになる。また、語体として見るかぎり、よりくだけた口語体として「談話体」（speech style）を区別することができる（魚返 同書）。たとえば、低いスタイルの書きことばなどは、典型的な談話体だといえるだろう。

このように近代口語体のなかにもスタイルのレベルの質的な異なりがあることから、内山(2002)では、近代口語体での談話体に相当する表現から新しい表現領域（主にオンラインのテキスト）での新しい規範文体が成立しているのではないかと指摘し、それを「近代口語体」に対して「現代口語体」と呼んでいる。

一方で、オンラインコミュニケーションで用いられる特徴的な表現を指しては、1990年代（以前）から「打ちことば」とも呼ばれており、佐藤・前田ほか編（2014：156f.）では、日本語学の用語として定義されている（項目執筆者は田中ゆかり）。オンラインで観察される特徴的な言語表現が、一方ではスタイル（文体）の問題と捉えられ、一方では言語（ことば）の問題と捉えられているわけである。

本稿では、これらの事象が言語（ことば）のレベルで捉えられるべきものかスタイル（文体）のレベルで捉えられるべきものか、あるいはそのいずれでもあり得るのかについて検討したいと考える。

1. 文字と筆記用具の歴史

文字 writing の発明は、それが文字であると明らかに認められる範囲で見ても、紀元前4千年紀に遡るものとされる（シュメール象形文字）²⁾。最古の文字が記された書字空間（ライティング・スペース）は、粘土板（保存のために素焼きにされる粘土板）であり、記された文字と筆記用具との関係は、最初期に粘土板・石膏板・蠟板をスタイラス（尖筆）で『搔く（引っ搔く）』ことから、パピルス・羊皮紙・紙にペンとインクで『書く』こと、そして、タイプライターで『打つ』ことへと推移した。

一方、日本語は奈良時代末期まで固有の文字言語を持たなかった（なお、それ以前の文字記録は純漢文や和化漢文によるものであるため、文字で書かれた最古の日本語の文章は万葉集と考えられる）。そのため、日本語の書きことばは、はじめから〈紙に筆〉によるものであり、その状態が比較的長く維持されることになった。

その後続く鉛筆（明治末～大正期に普及したと思われる）や万年筆（大正～昭和期に普及したと思われる）やボールペン（1950年頃から急速に普及したと思われる）も筆の代用品（毛筆に対して『硬筆』と総称される）と見做され、和文タイプライターも書くための手段としては一般には普及しなかった（主にビジネス文書の清書あるいは印字のための事務機器と考えられた）結果、日本語では筆記用具の交替が起こらず、ことばと筆記用具をめぐる議論がなされることもなかったのである。

2. 筆記用具と文章の関係

すでに述べたように、文字の歴史では筆記用具（と書字空間と）が変化し、それにともなって書きことばを実現する行為そのものも変化してきた。

しかし、日本語で、書きことばにおける筆記用具の関与性という問題が浮上したのは、1980年代に入ってからのことである。背景には、1980年代の半ば以降にワープロ専用機が急速に普及したことがある。筆の代用品の範囲で捉えることのできた従来の用具と異なり、その範囲をはみ出してしまう『機械』の登場を以ってはじめて、書きことばと筆記用具との関係性が認識され、「ワープロは日本語の文章を変えるか？」という問題設定が提起されることとなった。

しかし、この問題に対する計量研究の回答は、筆記用具によって文章のスタイルが変わる証拠はないとする否定的なものであった。手書きによる作文とワープロを使った作文との比較実験にもとづく統計的な検証によって、両者に明らかな差があるとはいえないことがわかったのである（金ほか 1994）。

この結果は、言い方を換えれば、書きことばのスタイルには書き手たる個人ごとのほとんど〈体質的な〉部分があるということを示唆している。スタイルの体質的な面については、日本語のテキストでの読点（、）の用法に関する研究（金ほか 1993）においても確かめられている。そこでは、井上靖・中島敦・林不忘・谷譲次・牧逸馬の作品群の読点の用法が分析され、計量的手法を用いたグループ分けによって井上靖、中島敦、林不忘・谷譲次・牧逸馬の3群が分離された。このうち、林不忘・谷譲次・牧逸馬は同一人物（長谷川海太郎）のペンネームであることから、テーマや作風は意識的に変えられても、書きことばのスタイルには意識的には変更できない部分があるということが明らかにされたのである。

3. 「打ちことば」の提案

前章で述べたように、日本（語）でワープロ専用機が普及すると、書きことばの領域にも『機械』が入り込みうることを認識させることになった。〈情報機器が日本語の書きことばを変える〉、それもおおむね良くない方向へと変えるという主張は、1980年代からもしばしば見られたものだが、1990年代になるとさらに強まった。

まだインターネットが普及していない時代にあつて、かかる主張は、主に保守的な傾向を持つ文筆家によってなされていた。同時に、日本語学の研究者たちが「ワープロは日本語の文章を変えるか」という問題に取り組んだのは、英語での前例があつたためと思われる。英語の書きことばのスタイルは、タイプライターの普及にともなって20世紀はじめに質的に変化したものとされている。すなわち、タイプライターによる即時の活字化が、論理的句読法を促すことを通じて文の構造の変化と短文化とをもたらしたのである（外山 1997、山中 1998）。

一方で、すでに述べたように、日本語ではワープロの使用が文章を変えないことが計量研究によって明らかにされたため、「打ちことば」という概念を立てる主張も現れた（この語は、筆者の記憶のかぎり1990年代はじめころにはすでに使用されていたものだが、おそらくは自然発生的な用語であり、正確な初出は不明と思われる）。この「打ちことば」は、田中（2011）において、オンラインコミュニケーションで用いられる言語を総称する日本語学の用語、すなわち、書きことばと話しことばの両方の要素を含むが、両者とは別のカテゴリとして捉えらえるものと定義された。この定義は、佐藤・前田ほか編（2014：156f.）でも維持されている。

これは、そのネーミングからして入力デバイスにキーボードやキーパッドを想定していることが明らかであり、筆記用具と表現行為とに着目した『第3のことば』の提案であると見てよいであろう。つまり、使用する道具の違いによって、書きことばそのものが従来とは別のものに変化するという主張だと言える。

4. 「打ちことば」の背景

「打ちことば」が提案された背景には、1990年代半ば以降のショートメール（SMS）や「携帯メール」（キャリアメールとも呼ばれる）の普及がある。その結果、そこでは特徴的な表現が観察されると指摘されるとともに、それが「打ちことば」のスタイルと捉えられたのである。「打ちことば」のスタイルの外形的な特徴としては、特に表記の面で装飾的であるもの、総じて文が短く表現が簡潔であることなどが挙げられた。

このとき、文が短く表現が簡潔であるという特徴から、「打ちことば」は、使用するデバイスの画面サイズ（表示される行の物理的な横幅）と関係しているのではないかという疑問が生じる。1990年代当時の「打ちことば」は、通話とSMS機能のみを持つ携帯電話（ベーシックフォン）やインターネットの閲覧や電子メール（e-mail）のやりとりが可能なフィーチャーフォン（いわゆるガラケー）によるものであり、いずれも2010年代以降の主流であるスマートフォン（スマホ）に比べて、画面の表示サイズや表示倍率（の変更）には大きな制約があったからである。

この仮説については、同じ書き手による学術論文（したがって、ジャンルやテーマは同等と言ってよいであろう）を計量的に比較した検証（内山 2000）が参考になる。そこでは、組版の形式（縦書きか横書きか／段組みがない＝1段組か段組みがある＝2段組か）に応じて1文の平均的な長さが変化するという結果が示されている。

1行あたりの文字数（表示可能な最大値）は、縦1段組み＞横1段組み＞縦2段組み＞横2段組みの順に大きいが、1行あたりの文字数（表示可能な最大値）の大きな組版の形式ほど、1文あたりの文字数の平均が長くなることがわかったのである。他方、読点の用法（前述の通り、おおよそスタイルのほとんど〈体質的な〉部分と見做されるもの）には組版の形式に応じた明確な差が見られなかった。

これらのことから、文の長さの変化、すなわちスタイルの違いは、投稿先の雑誌の書式（組版の形式）に応じた書き分け³⁾と見ることができる。

言い換えれば、読み手が「読む」環境を書き手が想定することがスタイル（の違い）に影響しているものと考えられるのである。おそらく、1行あたりの表示範囲の小さい書式で長い文を多用すると、行内での文の折り返しが頻繁となり、結果として読みづらくなるという意識が働いたものであろう。

このように、1行あたりの表示範囲の広狭による文の平均的な長さの変化、すなわちスタイルの違いは、紙の上のテキストでも見られるものであるが、それは研究者など組版の形式を明確に意識できる一部の書き手でのみ生じることができた現象だと考えることができる。そのため、このことを踏まえれば、文が短く表現が簡潔であるという「打ちことば」のスタイルの一面は、「携帯メール」の普及によって、もとは特定の書き手に限定されていた現象が、より多くの書き手に一般化したものと言えるであろう。

5. 「打ちことば」の概念

ここまで見てきたように、書き手と筆記用具との関係に注目するかぎり（これは、書く行為の視点だといえる）、「書く」のか「打つ」のかによって書きことばのスタイルは変わらないと見做されるべきであり、書き手と読み手および読みの環境との関係に注目するときには（これは、コミュニケーションの視点だといえる）、書きことばのスタイルは変わりうるものといえるのである。

このように、書きことばのスタイルが、筆記用具によってではなくコミュニケーションツールによって変わりうるものだとすれば、「打ちことば」のものとしたスタイルは（従来の）書きことばの範囲内で説明できるものといえるのではない。そのため、「打ちことば」と呼ばれる現象が観察されることは事実であるとしても、（従来の）書きことばと区別しなければその現象が説明できないというわけでもない。端的に言えば、オンラインコミュニケーションに対して「打ちことば」などの概念は不要（説明のために付け加えられた理論上は余分なもの）であると考えられる。

「書きことば」と区別される「打ちことば」というものがあるのであれば、ワープロ専用機が普及した段階で日本語の文章のスタイルが変化していなければならなかっただろう。しかし、コミュニケーションツールが変化した結果、日本語の文章のスタイルが変化する可能性があるということであれば、あくまでも「打つ」という行為は「書く」という行為に含めて、その裡でのスタイルの違いとして説明できる可能性が高いと見るべきであろう。

6. 「打ちことば」とは何か：まとめにかえて

では、1990年代から多くの人たちによって「打ちことば」と呼ばれてきたものは何だったのであろうか。

これを日本語の文体論の問題として考えれば、「打ちことば」の実体は談話体であるということになるだろう。しかるべく談話体がオンラインコミュニケーション（電子コミュニケーション）での規範文体として機能しているのであれば、近代以降の日本語の書きことばの標準である近代口語体の下位範疇と言えることになる。

「打ちことば」をオンラインコミュニケーションにおけるスタイルの問題として置きなおしてみれば、日本（語）では1980年代の後半に遡ることができる。実際に、ニフティサーブなどの商用のパソコン通信が広まると、その当初からオンラインコミュニケーションでは独特の表現が用いられると指摘されることがあった（川上ほか1993）。

スタイルの変異の要因には、言語の内在的要因（レジスターやジャンルなど）と言語の外在的要因とがあり、後者には社会の変化（体制の近代化など）と技術の変化⁴⁾とを想定することができる。いわゆる言文一致が社会の構造的な変化を背景にしていることは広く認識されてきた一方、技術の変化がスタイルにもたらす影響については軽視されてきたのではないかと思う。しかし、コミュニケーションツールが多様化すれば、スタイルも多様化しうると考えることができるはずである。近代口語体が文章のジャンルを通じた事実上

唯一の標準なのであれば、新たな技術の産物であるオンラインコミュニケーションに特徴的な規範文体が早くから派生していた、あるいは、比較的短期間で成立しえたことはむしろ自然なことであっただろう。

注

- 1) 一般にスタイルの高低は、[±高い] [±低い] とを組み合わせて、3つのレベル（高い・低くない＝高い、高くない・低くない＝ふつう、高くない・低い＝低い）で理解される（なお、高い・低い組み合わせは両立しないので除かれる）。
- 2) 文字様の記号ということであればさらに遡ることができるだろうが、それでもおおむね1万年前を超えることはないものと考えられている。
- 3) いうまでもなく学術雑誌には、縦書きや横書き、1段組や2段組など、それぞれに特徴的な組版の形式（レイアウト）があり、投稿者である研究者はそれを熟知しているものと考えられる。
- 4) 大きな事例としては、印刷技術（活版印刷）の発明もあげられる。印刷技術によって、一般の人々が文字を目にする機会が増え、大衆の識字化が促された。その結果、文字言語が特権階級の占有物から大衆化されるにつれて、大衆化された言語表現が広がってゆくことになった。

引用文献

- 内山和也（2000）「e-textにおける句読点に関する一考察」、『表現研究』72, pp.66-72, 表現学会。
- （2002）「現代口語体の表現スタイルについて」、『広島大学日本語教育研究』12, pp.83-90, 広島大学教育学部日本語教育学科。
- 魚返善雄（1963）『言語と文体』紀伊国屋書店。

川上善郎・川浦康至・池田謙一・古川良治
(1993) 『電子ネットワークキングの社会
心理』誠信書房.

金明哲・樺島忠夫・村上征勝 (1993) 「読
点と書き手の個性」, 『計量国語学』
18(8), pp.382-391, 計量国語学会.

———・———・——— (1994) 「手書き
とワープロによる文章の計量分析」, 『計
量国語学』19(3), pp.133-145, 計量国語
学会.

佐藤武義・前田富祺ほか編 (2014) 『日本
語大事典 (上)』朝倉書店.

田中ゆかり (2011) 『「方言コスプレ」の
時代：ニセ関西弁から龍馬語まで』岩波書
店.

外山滋比古 (1997) 『文章を書くヒント』
PHP研究所.

山中桂一 (1998) 『日本語のかたち』東京
大学出版会.

(2021年1月20日受付)